もうちょっとディープな日本史

＜二・二六事件で岡田啓介首相が殺されなかった理由＞

1932年の五・一五事件では犬養毅首相が殺害された。軍部の青年将校は『昭和維新』を訴えて、政治家を殺害し、天皇中心の政府を作ろうと考えていたんだ。だからその時の首相は"一番最初に狙う人物"になるはずだ。でも、二・二六事件では当時の岡田啓介首相は殺害されていない。それは何でだろう？

1936年2月26日。雪が降る早朝、武装した陸軍の将校達は政府の重要人物の居場所を次々と襲って、殺害していった。もちろん岡田啓介首相の首相官邸にも。
でも、首相の護衛の４名の警察官が必死に応戦。（その後、全員死亡）その隙に首相は官邸内のお手伝いさんの部屋に隠れた。
すると、事態を察した義理の弟で秘書官の松尾伝蔵が、反乱将校達の前に自ら走り出て、殺害されてしまう。
首相の顔をあまり良く知らない反乱将校達は「首相をやったぞ！」と官邸を後にする、、、。

（左）岡田啓介首相（右）松尾伝蔵

そう、松尾さんは首相を守るために、まさに命をかけて犠牲になったんだ。

クーデターの規模はこの二・二六事件の方がとんでもなく大きかった。それでも首相が生存できたのは、「この国のリーダーを死なせてしまっては日本が終わってしまう！」と考えた人達の必死の行動だった。

反乱する方も、それを防ぐ方も、先の見えない日本の未来を信じ、自分たちの行動で何かを変えようと言うものだったんだ。悲しいね。本当に悲しい。